



Title	北大生におけるメンター
Author(s)	若井, 邦夫
Citation	高等教育ジャーナル, 2, 163-170
Issue Date	1997
DOI	10.14943/J.HighEdu.2.163
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29855
Type	bulletin (article)
File Information	2_P163-170.pdf



[Instructions for use](#)

北大生におけるメンター

若井 邦夫

北海道大学教育学部

Mentors for Students at Hokkaido University

Kunio Wakai

Faculty of Education, Hokkaido University

Abstract In line with the call for paradigmatic shifts in other sciences, there are some conspicuous trends for constructing new perspectives in psychology. Particularly stressed there are relational, ecological, dynamic, and longitudinal approaches. In the past, psychology has put too much emphasis on individuals, almost neglecting the fact that the individuals' behaviors and mental processes are embedded in various environmental conditions. Needless to say, individual persons can never live in a vacuum, and are always interacting other people and environments. Especially concerned here is what and how young people in contemporary Japan are enjoying or suffering from human relationships. Guided by Vygotsky's idea that the activities and the associates who share the activities are the two locomotives of one's psychological development, we launched a Japan-US comparative study on experiential contexts of cognitive development some fifteen years ago. This is an interim report of the author's recent research deriving from the collaborative study. In order to probe the social network of students at Hokkaido University, two questionnaires surveys were administered. One asked the subjects about significant others for them, and the other asked the subjects to rate 55 items on seven-point scales, judging how each of the items fits as a characteristic of a 'mentor.' In addition, interviews were conducted with some other students to get a more realistic picture of significant others or mentors as a kind of case study. Major findings obtained through the two questionnaires were as follows; (1) Female subjects more frequently named same-sex (female) associates than male subjects. (2) Percentages of 'friends', 'teachers' and 'parents' mentioned as 'significant others' were much higher than other categories of associates. (3) Reasons for 'significant others' varied among the subjects, but 'specific teaching', 'being a model or a goal', 'full of charm as a person' (category No. 5), and 'a person who makes other people feel close' were most common. Male subjects more often referred to No. 5 and 'shared hobbies and experiences'. Female subjects, on the hand, more frequently mentioned 'peer relations and companionship' and 'close friends or lovers'. (4) Analysis of the rating of the characteristics of a 'mentor' showed that the most important characteristic was 'having firm beliefs and something to engage in', and 'attitudes toward others' placed second, 'techniques of teaching' third, 'sociability' fourth, 'Professional ability' fifth, and so forth. Although only six students were available for interviews, each case offered a very interesting picture of the relationship between the subject and the 'significant other' for a contemporary university student. In this brief interim report, two cases are introduced and commented on; one is an example of a 'mentor' who is a divorced mother but has been working very hard and is respected by the female subject, and the other is quite the opposite in that the male student interviewed named his own father as a significant other because the father had been a kind of antagonist for the subject but profoundly influential for him and eventually the subject is taking the same course in life, as a doctor, as his father.

1. 研究の目的

近年, 諸科学において, パラダイムの転換を図る動きが盛んであるが, 心理学の世界においても同様で, 特に人間の発達に関する心理学的研究の面で, 従来なかった新たな理論枠あるいは基本的視点の構築の試みが目立つようになってきた。そうした試みに共通の特徴をまとめれば, 関係論的, 生態学的, 力動的, 縦断的観点の強調にあるといえる。

すなわち, 従来, 「個人」中心に考えられることの多かった人の行動や発達の問題を「人と人」及び「人と環境」との関係や相互作用において捉えることの重要性が強調されるようになってきており, また, 人が日常生活する場の生態学的条件の中で捉えてこそ人の行動や発達はよく理解できるものであるという認識が深まりつつあり, また, まさに「動き」や「変化」である人の行動や発達を1回の観察や1辺のテストによる「静止像」で捉えるのではなく, 真に力動的な観点から把握しなければならぬとする理解が次第に浸透しつつあり, 従ってまた, とりわけ発達研究にあっては縦断的な観点から変化の様相を追わなければならないことが強調されるようになっている。

人の発達を考える場合, その人の性格・行動面の特徴や能力あるいは意図的努力などのいわゆる個体的要因・条件とともに環境的条件や要因を考えねばならないことは言うまでもなからう。人はその生涯を通じてさまざまな人と出会い, 時に大きな影響を受け, また時に相手に対して思わぬ作用を及ぼす。「出会い」「巡り会い」は, 人の成長・発達を考える上で欠かすことのできない大きな要因である。

特に, 発達途上の若い人達にとって, どのような友人や仲間をもち, 如何なる教師や指導者に巡り会えるかは, その後の人生に大きな影響を及ぼすであろう。近年, 人間関係の希薄化がますます強まっているように見え, 孤立を深める若者が増えているようであるが, それでも彼らとて何らか

の人脈の中に生き, 時に生涯続く交際の輪を築いていることであろう。

われわれは十数年前から「認知発達の経験的文脈」(Experiential Contexts of Cognitive Development) と題してコーネル大学名誉教授の Urie Bronfenbrenner 博士(1974)を中心とするアメリカのグループと日米比較研究を行っている。この日米共同研究の基本理念は「精神発達の2つの機関車は活動とその活動をシェアした相手である」とするヴィゴツキー(Vygotsky 1930)の考え方である。これまでの共同研究の結果は, Wakai (1989) や松田(1994, 1995)によって報告されているが, この短報はそれらの研究の延長あるいは応用として筆者が北大で独自に行う調査の一次集約である。なお, この調査は平成8年度の北海道大学高等教育機能開発総合センターのプロジェクト研究の一環として行われたものであることを付記する。

この短報の標題に直接関わる部分は以下に述べる後半部分(【方法】の「2.2.(2) 「メンター」の特性に関する評定」に対応する部分以降)であるが, 実際に行った調査の内容としては「重要な他者」(significant others) についての項目も含んでいるため, 記述の都合上, 一部それに関しても言及することを断わっておく。

2. 方法及び手続き

2.1 対象(以下, S s と略す)

筆者が担当する教育学関係の概説科目の受講者, 計79名(大半は北大の1年次生学生であるが, 2年次生も若干名含まれている)。

2.2 方法

2.2.(1) 「重要な他者」に関する質問紙調査

親や友人, 学校の先生を含めて, 自分がこれまでの生活の中で「大切な人」, 「重要な人物」と思われる人を思い浮かべ, その中から1人だけ選んで, その人の性別や年齢, 職業, S s 自身との関係, その関係の開始時・終了時の自分の年齢, 及

び「大切な人」「重要な人物」という理由などについて尋ねる項目を含む質問紙調査。

2.2.(2) 「メンター」の特性に関する評定

「師と仰がれる人」「優れた指導者」と言われる人の性格や行動あるいは能力面の特性・特徴について評定させるもので、予備調査に基づき表1(A~J)に示すような「メンター」に関係ありそうな基本的なカテゴリーを10個用意し、各カテゴリーについて、例えば「自分で打ち込めるものを持っている」とか「論理的思考力」などのような単文または単語を5項目ずつ作成した。そして、評定の信頼性を判断する一助として、例えば「動物がすきである」とか「走るのが速い」などの「メンター」の特性とは関係ないと思われる記述文(語)を5項目加えた(いわゆる buffer items)。実際の調査票では、論理的誤差や順序効果などを避けるため、項目の配列順はランダム化した。これら55項目のそれぞれにつき、「全く当てはまらない」(1)から「非常に当てはまる」(7)までの7段階尺度で評定を求めた。

2.2.(3) 面接による聞き取り調査

人と人との関係はまさに「ケース・バイ・ケース」で、多数のSsを対象とした一遍の質問紙調査では、なかなかその内実をつかみきれものではないことは言うまでもない。そこで、質問紙調査を補完する意味で、大学院生の協力を得て何人かの北大生に面接し、さまざまな角度から「メンター」と呼べる人物について語ってもらうことにした。当初、8人ほどの学部学生を予定していた

が、面接者の都合で実際に調査できた対象は結局6人であった。

2.3 手続き

上記Aの質問紙調査とBの評定を、1コマ約90分の授業時間を使い、それぞれ簡単な主旨説明と回答記入上の注意事項を伝えた後、1項目ずつゆっくり2回読み上げ、必要に応じて回答を誘導しない程度に簡単な説明を加え、暫く時間をおいて、ほぼ全員が記入し終えた頃を見計らって次の項目に進むという形で実施した。

Cの面接調査は、上記A、Bの方法による対象者とは全く別に、面接者となった大学院生がそれぞれの人脈で連絡のついた北大の学部学生を対象とした。

3. 結果と考察

3.1 「重要な他者」に関する質問紙調査の結果

この質問紙調査は前年度も別のサンプルで実施していたので、参考までにその結果も表示することにする。

1. Ssと関与者との性別対応。まず最初に、ごく基礎的事実を押さえておく作業として、Ssと関与者の性別対応を見てみると図1のようになった。この図に見られる通り、女子Ssが男性の関与者を挙げる比率は、男子Ssが女性の関与者を挙げる比率よりも遥かに高い。事の是非は別として、社会生活のいろいろな面で男性が重要な役割を果たしてい

表1 メンター特性評定尺度項目群クラスター

A. Professional Capabilities	G. Attitudes Toward Others
B. Personal Traits (1)	H. Teaching Techniques
C. Personal Traits (2)	I. Personal Impression
D. Appearance	J. Sociableness
E. Greed / Beliefs	K. (Buffer Items)
F. Attitudes Toward Self	

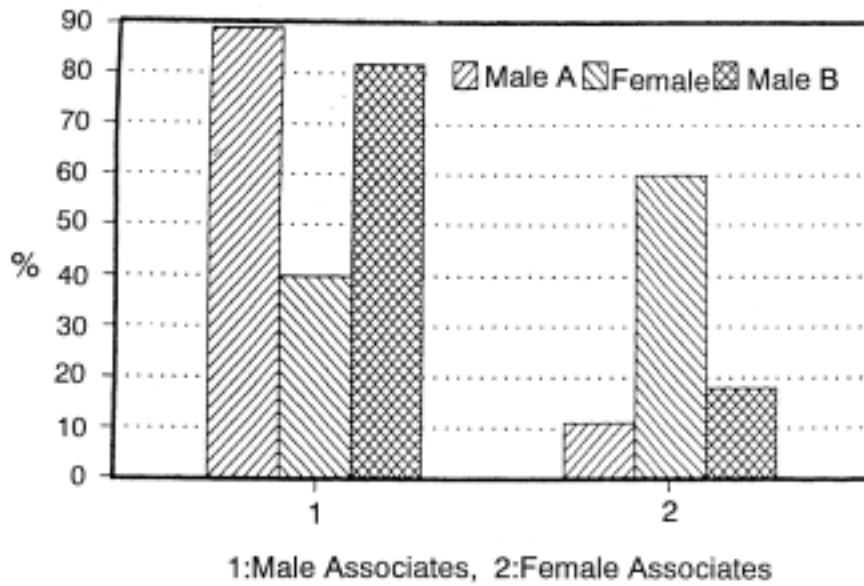


図1 Ssと関係者の性別対応

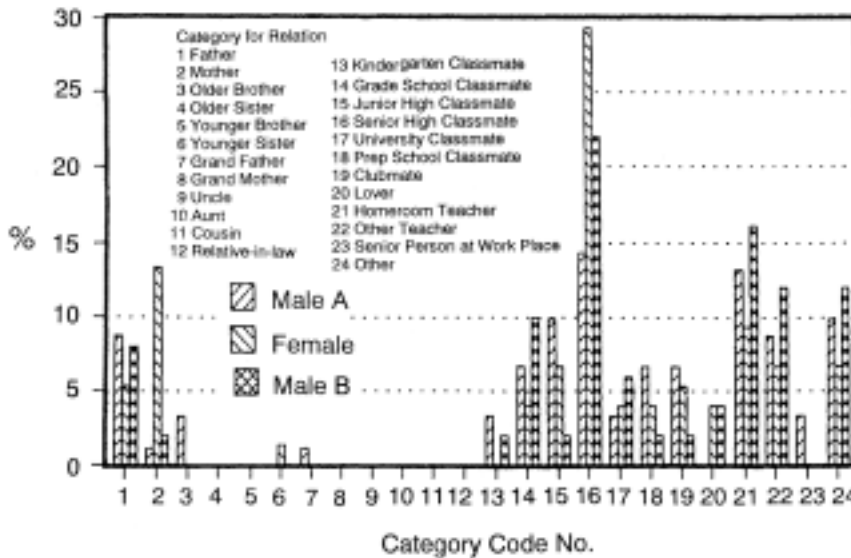


図2 Ssと関与者の関係

ることの表れと見ることができよう。

2. Ssと関与者との関係。Ssと関与者との関係を図2左上欄に見られるようなカテゴリーによって分類すると図2の棒グラフのようになった。相対的に、「友人」「教師」「父母」が高い比率を示す。この傾向は筆者らによる以前の研究結果とも一致するもので、日本のSsにおける‘peer orientedness’の特徴を示している。特に高校時代の友人が高い比率を示していることが注目される。今回の研究では、これまでと違って、「教師」のカテゴリー

を独立に設けたため、「重要な他者」としての教師の位置づけがより鮮明になったと言える。女子Ss群において「母親」を挙げる比率が顕著に高い点は当然と言えようが、「高校の友人」(カテゴリー No. 16)についても同様な傾向が見られた点については、手持ちのデータでは説明がつかず今後検討の余地がある。

3. 「重要な他者」とする理由。特定の人を自分にとって最も「重要な人」とする理由は、当然のことといいながら、実に多様なもので

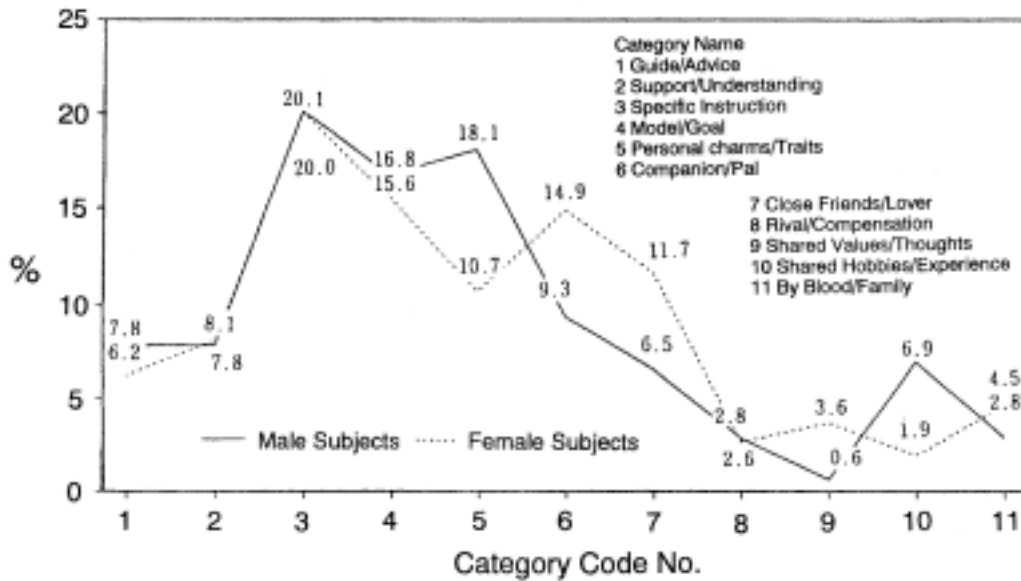


図3 「重要な他者」の理由

あった。それらを図3右上欄に示す11のカテゴリーに分類し、男女別に比率を出してみた結果、図3の折れ線グラフのようになった。授業の中で具体的に何かを教えてくれたり(カテゴリーNo.3)、モデルや目標になる人であったり(No.4)、人間的な魅力に富む人であったり(No.5)、親近感をもてる人であったり(No.6)することが相対的に高い比率を占めている。カテゴリーNo.5とNo.10(「趣味や経験の共有」)で男子Ssが相対的に高い比率を示し、カテゴリーNo.6(「仲間・仲よし」とNo.7(「親友・恋人」)では、逆に女子Ssの方が高い比率を示している点が顕著であるが、その理由のより詳しい内容や背景を探ることも今後課題である。

3.2 「メンター」の特性評定の結果

回収した評定用紙の内、記入漏れのあるものや明らかにバイアスのある評定をしていると思われるもの(例えば、全ての項目に同じような評定値をつけているもの)を除き、残ったものの中から、当座の分析作業の便宜上、さらに絞って、各Ss群とも50人ずつの回答をランダムに選んで評定

項目毎の平均を算出した。1年生女子については人数が極端に少なかったため今回の分析対象とはしなかった。しかし、それでは比較判断のしようがないので、前年収集したデータと併置してみることにした。項目毎の平均を先の表1に示したクラスター毎にまとめてその平均を算出した結果を図4に示す。尺度点4は「当てはまる」とも「当てはまらない」ともいえない中間点に当たるため、考察に値するのはポイント5以上と見てよからう。カテゴリーKはバッファー・アイテムであることから、評定値が顕著に低いことは当然であり、Dは「外見」に関する項目群であるところから予想通りの結果といえる。

「メンター」の特性として何が重視されるのかを考える一つの目安として、3つのSs群の内、少なくとも2群が5ポイント以上の平均評定値を与えたクラスターに注目して、高い方から順に挙げれば、第1位：E「固い信念や打ち込めるもの」ともっている」、第2位：G「他の人に対する態度」、第3位：H「指導技術・教え方」、第4位：J「社会性」、第5位：A「専門的力量」、第6位：F「自分に対する態度」となる。

これらの結果は経験的事実とも合致し、少なく

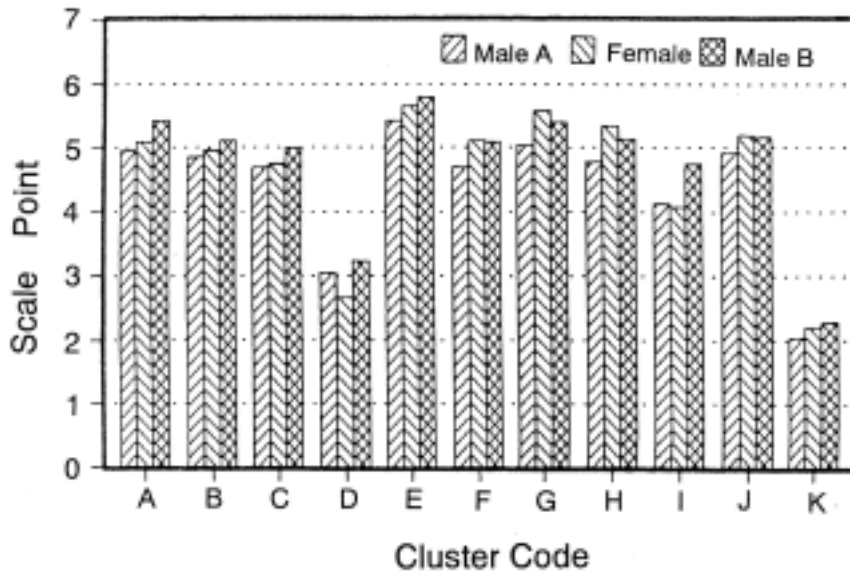


図4 「メンター」の特性評定

とも現代の大学生達が「メンター」と呼べる人の特性をどのように考えているのかを示す一つの事実として貴重なデータといえよう。しかし、クラスターにまとめることによって、返って失われてしまう意味合いもあるかと思われるので、個別具体的な事例に沿った考察も今後試みたいと考える。

3.3 面接による聞き取り調査の結果

ここでの面接調査は、質問紙調査では得にくい人間関係の機微に少しでも近づきたいとする気持ちからパイロット的に行ったものであるため、整理した形で結果を述べることはできない。しかし、具体的な事例はさまざまな様相の集約であり、時として統計的データ以上に詳しい情報をもたらしてくれることがある。

面接結果の記録をどう整理・分析すべきかについてもいまだ検討中であるが、とりあえず2つのケースを概略紹介し若干のコメントを試みることにする。

【事例1】

A. 面接対象者(S): 23歳, 女子学生。

B. 重要な他者(M): 母親, 現在52歳, 職業は編集関係。

C. 自分の母親を「重要な他者」とする理由; 価値観(女性が働くことについての考え方や人を地位で判断しないこと, 自分は自分という考え方など), 性格(一人でいても平気でいられるところなど)

D. 面接で語られた関係: Sの小さい頃に両親が別居し, 以来ずっと母一人, 子一人の生活。母親はしっかりしていて何でもできる人。具体的には言えないが, 母から大きな影響を受けてきたと感じている。母は編集関係の仕事をしてしたが, 女性が仕事をするのはごく自然で当たり前というふう感じられ, 母が働いていることでS自身が寂しいと思ったことはない。ただ, 母が「女性が資格なしで働くのは大変だ」というようなことを言っていたことがSの現在の進路選択に影響しているのかもしれない。母親は組合活動もしていて, そのためか, 人を肩書きや地位で判断することは全くなかった。地位に関係なく, 「できる人は, できる」「できない人は, できない」と考えている様子だった。S自身も周りの人を地位や

身分で判断することはないし、世間的には入るのが難しいとされる学部に進学したが、そのことを特にどう思うこともない。小学校に入った頃から母が付き合っていた男性と一緒に暮らすようになったが、その人が父親みたいに感じられて、家族のような感覚で暮らしていた。親しい友人は、変わっていると言うが、自分の中では自然で、今でも母が自分の思うように自由にやってくれて良かったと思っている。その人がいるから自分が北海道まで来れたとも思っている。性格的には母とは違い、Sはどちらかというと鈍くさい方だが、母がいつも髪を結ってくれたり、金銭的な支えもしてくれて、アルバイトもしたことがない。Sが無理をしたり、辛い思いをしたりするのを見るのは嫌だったようで、よく「嫌だったら止めてもいいのよ。」と言っていた。Sがやりたいということは、たいてい「あなたが決めたのなら」と許してくれた。

【事例2】

- A. 面接対象者(S): 21歳, 男子学生。
- B. 重要な他者(M): 父親, 現在51歳, 職業は医師。
- C. 自分の母親を「重要な他者」とするという理由; 「反面教師」的存在(理不尽な厳しさ, 他の価値を認めないところなどを見て, 自分はそうはなるまいと思ってきた。) 目標・対抗意識(父親を越えてやるという思いがあったので, 今の自分があると思う。)
- D. 面接で語られた関係: Sは長男で下に3人の妹。Mは自分に厳しい人だが, 子どもにも厳しく, 自分の価値観を絶対的なものとしてそれを押しつけるところがあり, Sが中・高生の頃はそれが非常に嫌だった。実際に反抗することはしなかったが, 心の中では悔しく思ったりあんな人間になるまいと思っていた。自分の何かを伸ばしてくれたという思いはないが, しかし父の存在があったから今の自分がある

のだとも思う。父からは勉強のことでよく言われた。「おまえは俺を越えられない。」とも言われた。だから、敢えて同じ土俵で越えてやるという気もあり、今の学部に入ったところもある。以前、父が「サラリ - マンなんてつまらない。」というようなことを言った時《サラリ - マンだっていいじゃないか。何様だと思っているんだ》と腹がたったこともあったが、いま考えてみると、医学系の学部に入ったのはやはり父の影響があったのかとも思う。心の中で反発し、自分なりに勉強もしたが、父に言われたからしたと思われるのは嫌だった。そういう気持ちは今でもある。大学に入るまでは、とにかく受験勉強という単一の価値でやっていればよかったが、入ってからは、他の人が次々と自分のやりたいことを見つけていって、一時、取り残されたような感じになったことがあった。その時、人のやらないようなことや自分の興味のあることをやっていきたいと思った。それも父の影響によるものかもしれない。父のやっていないことをやってやろうという気持ちもあり、父が学生時代いろいろ悩み、宗教の本を読んだりした時期があったということを聞いていたので、悩んで学生生活を終えたくない、悩むのは無駄だ、何かしようと思った。父自身、コンプレックスの強い人だと思う。父の家は貧しかったようで、その父親は商売をしていたが、酒好きでよく酒を飲んでいたらしい。父はそういう自分の父親を見下していたようで、「自分は絶対あはなりたくない」と思っていたらしい。医師になることを目指し猛勉強して、ついにその目的を達成し、ある程度成功したという自負がある。また、今でも毎日ジョギングしたり、英会話の勉強をしたり、外国の病院と提携する事業を興すのだとあって、その国の言葉を勉強したりと、自己鍛錬の人ではある。それを子どもにも求め、他の価値を認めないところは嫌だが、今でこそ父もいくらか自分を認めて

くれるようになったし,自分も今は,父を越えるかどうかということはどうでもよくなり,父は父,自分は自分と思えるようになった。

上の2つの事例を見ただけでも,人と人との関係は複雑で,また極めて力動的なものであることがわかる。「重要な他者」の類型で言えば,【事例1】の母親は,面接対象者自身にとってはやはり一つのモデルになっていると言えよう。それに対して,【事例2】の父親は面接対象者自身が語っているように「反面教師」としての役割を果たしている。

日本の共同研究者の一人,松田(1994)は,他のサンプルを用いて「重要な他者」の因子分析を行い,‘Teacher’,‘Challenger’,‘Model’,‘Supporter’及び‘Companion’の5因子を得ている。こうした因子によって考えてみると,対人関係の機微がよりよく理解されるように思われる。しかし,実際には,一人の人物がこうした因子のいくつかに関わる複雑な役割を果たしていることもあろう。その辺の複雑でダイナミックな関係の解明は今後の課題である。

引用・参考文献

- Bronfenbrenner, U. (1974), 磯貝芳郎・福富 護 (訳)(1996),「人間発達の生態学」,川島書店
- Vygotsky, L. S. (1930), 柴田義松(訳)(1970),「精神発達の理論」,明治図書
- 松田 惺・若井 邦夫・小嶋 秀夫(1994),「発達における重要な他者(メンタ-)との関わりの分析(1)日米大学生の比較」,『愛知教育大学研究報告(教育科学)』, 43, 105-118
- 松田 惺・若井 邦夫・小嶋 秀夫(1995),「発達における重要な他者(メンタ-)との関わりの分析(2)日米高校生の比較」,『愛知教育大学研究報告(教育科学)』, 44, 101-120
- Wakai, K. et al. (1989), "Significant others for college students: A Japan-US comparison in experiential contexts of cognitive development. Paper presented at the 10th Biennial Meetings of the International Society for the Study of Behavioral Development," Jyväskylä, Finland.